社説に見られる外来語

橋　本　和　佳

1　調査の目的

現代日本語において，どのように外来語が使用されているかを知るためには，語彙調査を行うことが有効である。本稿では，新聞の社説に使用された外来語の語彙調査を行う。これまで，調査対象には外来語が氾濫していないものが望ましいと考え，教科書の調査を行ってきた。高校国語教科書[①]，中学校国語教科書[②]の調査結果より，小説，評論などの文学作品に出現する外来語には，日常生活においてよく使用される語が多いが，採用されている作品の内容に左右されやすいこと，「学習の手引き」などの〈学習〉欄[③]に出現する外来語には，国語科特有の語が多いことが明らかになった。このことから，教科書の語彙調査のみで，外来語の使用実態を把握することは難しいことがわかった。

新聞は，長期にわたってマスメディアの中心的媒体として定着している。新聞には，毎日，週刊誌１冊以上の分量の，さまざまな文章が掲載されており，情報量が非常に多く，また多くの人が目を通すものである。教科書は多くの学生が目を通すものであるのに対し，新聞はより広い範囲の人が目を通すものである。新聞は，リアルタイムのニュースを掲載するのが第一義であるのに対し，教科書は，教育に適した教材，普遍的な教材を掲載するのが第一義である。読者の年齢面でも，教科書は児童・生徒（18歳以下）対象，新聞はおもに大学生や社会人（18歳以上）を対象にしているという違いがある。

また，社説は，記者生活を何十年もしてきたベテランを中心とした論説委員が，交代で社の意見を代表して発表するものである。つまり，書くことのプロが，社の代表として責任を持って意見を展開するものであり，各社の新聞において，もっとも重要な位置を占める中心(メイン)欄である。社説の内容は，ほとんどがその時々に話題となっている政治，経済，事件のニュースに対する意見である。本稿では，このような性格を持つ新聞の社説において，外来語がどのように使用されてきたかを明らかにしたいと考える。

2　調査の対象

朝日新聞の1960年から1999年までの40年間の朝刊に掲載された社説を対象とする。抽出方法はサンプリング抽出で，２ヶ月に１回，つまり１年に６回分の社説をランダムに抽出する。社説の分量は，40年間ほぼ変化はなく，１日約1600字である。特集日は，１人が1600字執筆しているが，それ以外の日は，ほぼ毎日１人約800字で，２人ずつが執筆している。本稿では，800字の社説を１社説と数えることとする。つまり，１日２社説ずつ，１年で12社説，40年間分で計480社説，約384,000字の社説が対象となる。ただし，人名，地名，組織名，行事名などの固有名詞や，半角で書かれている単位（メートル等），通貨単位（ドル等）は調査対象から省いた。

社説には，各新聞社のカラーが特に出ると言われる。朝日新聞の社説について，朝日新聞社に，社説の執筆者(論説委員)に関する質問状を送ったところ，朝日新聞東京本社広報室から文書での回答を得た。その内容を要約すると以下の通りである。

> 社説を担当している論説委員は，東京，大阪，西部（九州），名古屋の各本社を合わせて約40人で構成されている。論説委員室は，政治，経済，社会，学芸，運動，科学などの各分野でニュース報道を担当している出稿部で構成された編集局とは別組織であるが，随時，編集局との間で人事交流がある。現在，論説委員の年齢は30歳代から50歳代と幅広くなっている。論説委員は，国内外の動向を正確に伝えるニュース報道部門の記者とは異なり，それらの動向について朝日新聞社としての見解を社説などを通して読者に示すものである。ニュース報道部門での記者経験を積み，担当分野についての詳しい知識や深い造詣を基にして，多様な見方や考え方を踏まえたバランスある見解を的確に分かりやすく伝えるよう努めている。

3　調査の単位

本調査における調査単位には，単純語も，２つ以上の成分からなる合成語も，１語とするＷ単位（Word 単位[④]）を使用する。なお，「自立成分１個で出来ているのが〈単純語〉…(中略)…１個の自立成分と他の成分（自立・非自立を問わない）との結合によって成り立っているのが〈合成語〉である」という玉村文郎（1985[⑤]）の定義に従うこととする。また，本稿では，形容動詞（スムーズな　等），サ変動詞(スタートする　等)は，活用語尾を含めて１単位とし，形容動詞は「―な形」，サ変動詞は「―する形」を代表形とする。

4　調査の規模

本調査で抽出された外来語は，異なり語数1248語，延べ語数2300語である。

延べ語数2300語を，年代順に見ると，その語数にはどのような変化が見られるだろうか。表１は，1960年から1999年までの40年間を５年ごとに８つの区間に区切って，各区間における延べ語数と，１つの社説に平均何語の外来語が出てくるかをまとめたものである。

表１　延べ語数の変化

	60-64	65-69	70-74	75-79	80-84	85-89	90-94	95-99	60-99
延べ語数	161	249	376	296	337	363	272	246	2300
１社説あたりの語数	2.68	4.15	6.27	4.93	5.61	6.05	4.53	4.10	4.79

全体では，約800字，原稿用紙２枚分の社説の中に4.5語の外来語が使用されるのが平均的である。延べ語数は，60年代が４10語ともっとも少なく，続く70年代は672語，80年代は700語と，70年代から80年代にかけて増加傾向にある。しかし，90年代は518語と減少している。１社説あたりの外来語の語数は，60年代前半は2.3語であったが，最も多い70年代前半は6.7語になっており，90年代後半は４語程度に減っていることがわかる。また，社説において，見出しに使用された外来語の語数もこの傾向と合致している。見出しに外来語が使用された社説数は，60年代は７社説，70年代は８社説，80年代は７社説であるが，90年代は３社説に減少している。

我々の日常生活においては，90年代に入ってからもますます外来語使用が増加しているように感じられる。しかしながら，90年代の社説において，外来語使用が減少しているのはなぜだろうか。朝日新聞記事データベースを用いて，1985年以降の，外来語に関する記事を検索したところ，1980年代後半から国語審議会において外来語の問題がとりあげられたこと，またそれに伴う世の中の意識の変化が明らかになった。1991年６月28日「外来語の表記」の内閣告示・訓令までの数年間，国語審議会においては，外来語が重要なテーマであった。「外来語の表記」の問題に関連して，「外来語の乱れ」「外来語の氾濫」の問題もとりあげられた。このように，国語審議会で外来語が問題になるにつれ，国民の意見が，新聞紙面にさまざまな形であらわれ始める。意味のわかりにくい外来語が多い，日本語の説明を併記すべきだ，外来語を使用せず日本語に言いかえるべきだ，といった内容の投書が，80年代後半から活発になり，90年代前半にはピークに達する。90年代後半に入ると一段落するが，官公庁，新聞，放送における外来語の増加に対

する批判意識はその後も根強く，2000年９月には官庁の文書やメディアの用語における外来語の増加をふまえ，「定着している外来語は使用してよいが，一般への定着が不十分な外来語は言い換える」という国語審議会の指針案が発表された。

「外来語の使用」を「外来語の氾濫」つまり「日本語の乱れ」と否定的にとらえ始めた1980年代後半からの世の中の空気と，社説における90年以降の外来語の減少とは，密接に関係していると考えられる。70年代から80年代にかけて，外来語をどんどん取り入れてきたことから，外来語の氾濫が指摘されるようになり，90年代に入ってから外来語の使用に対する抑制意識が働いたたのであろう。語の採択や文章表現においても影響力を持つ新聞の社説を執筆する論説委員にとって，その抑制意識が特に強く働き，外来語の使用に慎重な姿勢を示したと考えられる。

6　単純語

本調査で得られた外来語のうち，単純語は異なり語数374語，延べ語数1095語であった。異なり語数では全体の約30%であるが，延べ語数では約50%を占める。出現度数の上位10位までの語は「インフレ」(40)「テレビ」(38)「スポーツ」(26)「カルテル」(20)「ケース」(意味は「場合」)(18)「エネルギー」「コミュニケ」「スト」(17)「ゲリラ」(16)「イメージ」「コスト」(15) であった。

7　外来語同士の合成語

外来語同士の合成語は，異なり語数96語，延べ語数152語である。異なり語数では全体の約８%，延べ語数では約７%にすぎず，外来語同士の合成語の語数は少ない。また，２つ以上の社説に出現した語は次の14語のみであることから，外来語同士の合成語のほとんどは，一度しか出現しないことがわかる。

(社説数４)ホームヘルパー，マスコミ　(３)キャッチフレーズ，ニュービジネス
(２)カラーテレビ，キャピタルゲイン，ゴーサイン，スクラップ・アンド・ビルド，トップクラス，ビッグスリー，プロジェクトチーム，ベースアップ，ボートピープル，モデルケース

8　和語，漢語等との合成語

外来語が，和語や漢語と結合してできた合成語（混種語）は異なり語数729語，延べ語数965語である。異なり語数では，全体の約60%，延べ語数では約40%を占める。単純語と混種語とでは，異なり語数と延べ語数の比率が逆転していることから，単純語に

比べて，混種語の使用頻度は低いことがわかる。

表２は，結合する成分の語種(漢語，和語，ローマ字語および数字)によって分類したもの，表３は，外来語成分の位置によって分類したものである。

表２　結合成分の語種

成分の語種	異なり語数	延べ語数
和　語	43	62
漢　語	671	888
ローマ字，数字	4	4
和語，漢語両方	11	11
計	729	965

表３　外来語成分の位置

外来語成分の位置	異なり語数	延べ語数
前項　(外)―	344	484
中項　―(外)―	54	57
後項　―(外)	323	414
前＋後　(外)―(外)	8	10
計	729	965

表２より，外来語が他の成分と結合して合成語を作る場合，漢語と結合しやすく，和語とは結合しにくいことがわかる。これは，漢語は造語力が非常に強いのに対し，和語は漢語ほど造語力が強くないためであろう。特に，外来語は語形が長いため，語形が短く，正確に情報を伝えられる漢語と結びつきやすいと考えられる。

漢語との合成語のうち，２つ以上の社説に出現した語は，671語中42語のみ（約６％），３つ以上の社説に使用された合成語は「インフレ対策」（３）「インフレ抑制」（５）「エネルギー革命」（３）「エネルギー源」（３）「エネルギー資源」（３）「急ピッチ」（６）「金融システム」（３）「歳出カット」（３）「スト権」（３）「石油ショック」（６）「ダム建設」（４）「不況カルテル」（３）「プロ野球」（３）「ボランティア活動」（４）の14語であった（カッコ内は社説数)。

和語との合成語43語のうち，２つ以上の社説に使用された語は「大型スーパー」（２）「為替レート」（３）「コスト高」（４）「コスト引き下げ」（２）「メーカー側」（２）「ルールづくり」（２）の６語のみであった（カッコ内は社説数)。

以上のように，漢語との合成語も，和語との合成語も，２つ以上の社説に使用される語が非常に少ないことから，これらの合成語には，一時的に結合したと思われる頻度１の語が多いことがわかる。

「その他」に入れた合成語は，和語，漢語，外来語の３つの語種で構成される11語である。語種と結合の種類によって分類すると以下の通りになる。

「〈地元〉エゴ」「〈巡回型〉ホームヘルパー」(〈漢語＋和語〉＋外来語)，「町長〈リコール騒ぎ〉」「婦人用〈ナイロンクツ下〉」(漢語＋〈外来語＋和語〉)，「〈賃金コスト〉高」(〈漢語＋外来語〉＋和語)，「大型〈宇宙開発ロケット〉」(和語＋〈漢語＋外来語〉)「〈紙製〉パック」(〈和語＋漢語〉＋外来語)，「〈ベッドふさぎ〉高齢者」

「〈ボタン型〉水銀電池」(〈外来語＋和語〉＋漢語),「生ごみ〈コンポスト（たい肥）化機器〉」(和語＋〈外来語＋漢語〉),「〈高圧ガス〉〈取締法〉」(〈漢語＋外来語〉＋〈和語＋漢語〉)

表３より，外来語の成分は，合成語の前項成分になるものが異なり語数344語，後項成分になるものが異なり語数323語と，ほぼ同数であった。このことから，混種語においては，外来語成分は前項成分にも後項成分にも位置することがわかる。３つ以上の成分が結びつく場合には，中項成分になる語（「海外ボランティア活動」「金融システム安定化対策」等，異なり語数54語）や，前項成分と後項成分との両方に位置する語(「エナメル電線メーカー」「データ通信回線サービス」等，異なり語数８語)もある。

９　形容動詞，サ変動詞について

外来語のほとんどは名詞である。本調査においても，名詞は，異なり語数は1199語(96%)，延べ語数は2212語（96%）であった。名詞以外には，「―だ，な，に」などを伴う形容動詞，動作性の名詞に「する，させる，できる」などを伴うサ変動詞がある。形容動詞は異なり語数16語，延べ語数は21語であった。サ変動詞は異なり語数33語，延べ語数67語であった。また，形容動詞の語幹に「さ」を後接し，名詞化して用いられる語も１語（ルーズさ）あった。これらの名詞以外の語は，異なり語数，延べ語数共に全体の４％を占めるに過ぎない。名詞は，形態的な語尾特徴が要求されないため，日本語への取り入れは容易である。それに対し，形容動詞やサ変動詞は単語形成に形態的な制限があり，名詞に比べて日本語に取り入れられにくいため，外来語の日本語化の進み具合を示すものであるといえよう。本調査で抽出された外来語の形容動詞，サ変動詞は以下の通りである。ただし，活用語尾は省略する。

形容動詞（15語）

(社説数３)スムーズ　(２)オープン，タイムリー，ユニーク

(１)カルテル的，カンフル注射的，シャーマニスム的，スポーツ好き，スリム，ソフト，ノーマル，フル，マクロ的，マゾヒスティック，リベラル

サ変動詞（33語）

(社説数10)スタート　(５)エスカレート，ストップ　(４)チェック　(３)カバー，コントロール　(２)クローズアップ，コストダウン，システム化，ミサイル攻撃，リード　(１)アンケート調査，エンジョイ，コメント，コンクリート詰め，ショー化，スカウト，スパイ，スピード化，スポーツ，スライド，セット，セレモニー化，チャーター，テスト，テレビ中継，バイパス，パス，バランス，フィット，フル回

転，モニター，リンク

10　高頻度の語彙

本調査における高頻度語彙は，どのような語であろうか。表４は出現度数６以上の語（64語）を度数順に並べたものである。

表４　出現度数順語彙表（64語）

順位	度数	外　　来　　語
1	40	インフレ
2	38	テレビ
3	26	スポーツ
4	20	カルテル
5	18	ケース
6	17	エネルギー，コミュニケ，スト
9	16	ゲリラ
10	15	イメージ，コスト
12	14	グループ，メス
14	13	イオン交換膜法，タウン誌，バランス
17	12	トンネル
18	11	スタートする，テーマ
20	10	カード，カリキュラム，ニュース
23	9	サービス，サラリーマン，メーカー
26	8	システム，チャンス，ペース，ヘルパー，メンバー
31	7	インフレ抑制，クーデター，コンピューター，シンポジウム，スト権，スモッグ，スローガン，石油ショック，ゼネスト，バス，ピーク，ビジョン，不況カルテル，ブレーキ，プロ野球，ホームヘルパー，マイカー，ルール
49	6	イニシアチブ，介護サービス，急ピッチ，金融システム，航空ショー，コミッショナー，シャトル，ジレンマ，データ通信，トップ，プラス，ムード，リーダー，リーダーシップ，リサイクル，リハビリテーション

これらの語は，ある社説で何度も使用された語と複数の社説に重複して使用された語とに分類される。社説においてよく使用される語を知るためには，特に，たくさんの社説に使用された語を調査する必要がある。社説数６以上の語は，表４で挙げた64語の53％にあたる，以下の34語である。

(社説数21)インフレ　(16)ケース，テレビ　(14)エネルギー，メス　(13)バランス　(12)イメージ，コスト　(11)グループ　(10)スタートする，テーマ　(９)スト，ニュース　(８)サービス，チャンス，メーカー　(７)サラリーマン，スポーツ，ビジョン，ブレーキ，ペース，メンバー，ルール　(６)イニシアチブ，急ピッチ，クーデター，スローガン，石油ショック，トップ，バス，ピーク，プラス，リーダー，

リーダーシップ

この34語は，社説において，高頻度であるだけでなく，幅広い範囲でよく使用された語であるといえる。「インフレ」「エネルギー」「クーデター」「コスト」「スト」「スローガン」「石油ショック」など，政治経済に関する語群は，時事問題を扱う社説における特徴的な語群であるといえよう。また，人や団体を表す「グループ」「サラリーマン」「メーカー」「メンバー」，特に指揮をとる立場にある人物（各国の首相や大統領など）やその言動に対して使用される「イニシアチブ」「トップ」「リーダー」「リーダーシップ」といった語が見られることも特徴である。「急ピッチ」「スタートする」「チャンス」「ピーク」「ペース」などの「動き，時機，状態」等を表す語や，「バランス」「ビジョン」「ルール」などの語は，社会の情勢や方向性を分析したり，物事に対する意見を主張したりする社説で多用される語群といえよう。また，「テレビ」「イメージ」「テーマ」「ニュース」「スポーツ」「バス」「プラス」は，日常生活において一般によく使用される語である。「ケース」は，「～のケースには」というふうに「場合」の意味で使用される。

また，よく使用される慣用句の一部として出現する語群がある。例えば，「メス」は，出現した14度数中13度数は「メスを入れる」「メスを加える」という慣用句で，物事の根本的解明のために実態を調査する必要性を主張するときに使用されている。「ブレーキ」は，出現した７度数中６度数は「ブレーキをかける」という慣用句で，物事の進行や活動を抑制する必要性を主張するときに使用されている。

また，これらの34語について，それぞれの語がどの年代に多く使用されたかを調査する。長い期間にわたって使用されている語は，日本語に定着した語であるといえよう。それに対し，ある年代において特に使用されている語は，その年代の特徴語彙であるといえよう。表５は，60年代，70年代，80年代，90年代の各年代に，34語がそれぞれいくつの社説に使用されているか（社説数）をまとめたものである。

表５より，34語中19語(56%)は全年代にまたがって出現していることがわかる。社説数10以上の11語中９語(82%)が全年代に出現している。一方，ある時代に特徴的な語を挙げると，「インフレ」「石油ショック」は時代を反映する語であり，70年代を中心に使用されている。「イニシアチブ」「バランス」「ビジョン」などは，徐々に使用が少なくなっている。逆に「イメージ」「サービス」「テーマ」「トップ」「リーダー」などは，使用が徐々に増えていることがうかがえる。

70年代を中心に使用された「インフレ」「スト」「石油ショック」は社説において，記事素材となる語である。それに対し，70年代から徐々に使用されるようになった「イメージ」「サービス」や80年代を中心によく使用された「メスを入れる」「ブレーキをかけ

表5　年代ごとの出現社説数

外来語	60年代	70年代	80年代	90年代	全体
インフレ	2	14	5	0	21
ケース	2	4	6	4	16
テレビ	3	6	3	4	16
エネルギー	2	4	6	2	14
メス	2	4	7	1	14
バランス	4	6	2	1	13
イメージ	0	4	3	5	12
コスト	2	4	3	3	12
グループ	4	3	2	2	11
スタートする	1	2	4	3	10
テーマ	1	1	3	5	10
スト	2	3	3	1	9
ニュース	2	2	4	1	9
サービス	0	1	5	2	8
チャンス	3	1	1	3	8
メーカー	1	2	5	0	8
サラリーマン	2	2	1	2	7
スポーツ	2	3	1	1	7
ビジョン	2	4	1	0	7
ブレーキ	3	0	4	0	7
ペース	2	1	2	2	7
メンバー	1	1	2	3	7
ルール	1	1	2	3	7
イニシアチブ	3	2	1	0	6
急ピッチ	2	1	3	0	6
クーデター	1	1	2	2	6
スローガン	1	2	0	3	6
石油ショック	0	5	1	0	6
トップ	0	1	3	2	6
バス	0	3	3	0	6
ピーク	1	0	2	3	6
プラス	1	1	3	2	6
リーダー	0	2	2	2	6
リーダーシップ	4	1	0	1	6

る」などは社説の文体を形づくる語である。80年代になると，記事素材となる語に減少するものがあり，社説の文体を形づくる語に増加するものがあるという傾向を指摘できる。ただし，社説数が少ない語の出現しない年代については，偶然の空白である可能性がある。年代ごとの使用率の変化を考察するために，今後，他の資料で語数を補い，調査を進めたいと考える。

11　頻出する外来語の成分

外来語が，どれだけ日本語の中に定着しているかを測る一つの基準として，造語力の強さを挙げることができる。一般的に，漢語は造語力が強いが，和語，外来語は造語力がそれほど強くないと言われる。では，単純語として用いられるだけでなく，合成語，特に混種語として和語，漢語と結びついて用いられる外来語には，どのようなものがあるだろうか。ここでは，合成語の成分となりやすい外来語，つまり造語力の強い語を，M単位[6]に分解することで明らかにする。他の成分と結びついて，たくさんの合成語をつくる外来語成分の上位５位は「エネルギー」「サービス」「グループ」「カルテル」「コスト」「スト」である。各成分を持つ合成語は以下の通りである。

○エネルギー（31語）

（エネルギー　―）　開発，革新，革命，危機，供給，源，懇談会，資源，事情，情勢，消費，政策，対策，部門，法案，面，問題，利用効率

（―　エネルギー）　核熱，自給，省，石油代替，全，太陽

（―　エネルギー　―）　一次・需要，国内・資源，省・設備，省・投資，総・需要，総合・対策投資促進税制，代替・源

○サービス（22語）

（サービス　―）　化，改善，業，供給，拠点，経済化，部門

（―　サービス）　医療，介護，基本，公共，在宅，在宅者，生活，通話，デイ，データ通信回線，データ通信回線網，データ通信設備，配食，福祉

（―　サービス　―）　家事介護・部門

○グループ（20語）

（グループ　―）　運用，会員，ホーム

（―　グループ）　欧州，学者，官僚，企業，供血，献血，後発，支援，指導，住民，先発，専門家，男性社員，中学三年生，日本，犯行，品目

（―　グループ　―）（なし）

○カルテル（19語）

（カルテル　―）　ブーム，結成，行為，体質，的な，問題

（―　カルテル）　勧告，公認，国際，市場分割，生産調整，中小企業，適用除外，鉄鋼，不況，万年不況，輸出，輸出関連

（―　カルテル　―）　不況・後

○コスト（18語）

（コスト　―）　ダウンする，切下げ，計算，構造，削減，増，増加分，高，引き下げ，面

（―　コスト）　建築，原発建設，生産，製造，賃金，発電，平均

（―　コスト　―）　賃金・高

○スト（18語）

（スト　―）　回避，決意，権，権奪還闘争，権問題，戦術

（―　スト）　一揆的，違法，海運，港湾，スケジュール，政治，ゼネ，炭鉱，断固，長期，無期限

（―　スト　―）（なし）

（スト　―　スト）　・権・

「エネルギー」を成分に持つ合成語がもっとも多く，特に「エネルギー」が前項成分になる語が多い。また，３つ以上の成分が結合した語や，「エネルギー」が中項成分となる語も多いことが特徴である。「サービス」「グループ」「カルテル」「スト」は後項成分になる語が多い。これらの合成語を見ると，そのほとんどが，外来語と，造語力が強い漢語が結合した語である。和語と結合したものは，「コスト切下げ，―高，―引き下げ」である。形容動詞化したものは「カルテル的な」，サ変動詞化したものは「コストダウンする」である。また，「スト」は「ストライキ」の略語形である。「スト」は略語化され，さらに合成語を作りやすいという点で，語の日本語化が進んでいる例であるといえよう。

上位５位までの６語に次いで，合成語を作りやすい成分は「スポーツ」（14語）「テスト」「ミサイル」（13語）「データ」（12語）「ガス」「システム」「ブロック」（11語）「テレビ」（10語）「チーム」「ブーム」「ホーム」（９語）「インフレ」「センター」「レベル」（８語）の14語である。上記の６語にこの14語を加えた20語の中で，合成語の成分としてだけでなく，単純語としても多く用いられる語は「インフレ」（出現度数40），「テレビ」（38），「スポーツ」（26），「カルテル」（20），「エネルギー」「スト」（17），「コスト」（15），「グループ」（14），「サービス」(9)である。これらの語は社説において，特によく用いられる語群であるといえよう。単独では用いられない語は，20語のうち「センター」「ホーム」の２語であった。

12　結　　論

社説に使用される外来語について，その概要をみてきた。外来語の使用は増加の一途をたどっており，外来語の氾濫がしばしば議論されてきた。40年間を各年代に区切って

調査したことによって，社説においては，そのような批判の影響を受け，90年代に入ると外来語の使用が減ることがわかった。

社説における高頻度語彙には，(1)「インフレ」「スト」などの政治経済に関する語 (2)「リーダー」「グループ」などの人や団体を表す語 (3)「チャンス」「ピーク」などの動き，時機，状態を表す語 (4)「バランス」「ビジョン」などの社会情勢を分析する際に用いる語 (5)「テレビ」「スポーツ」などの日常生活においてよく使用される語 等が多い。また，使用される外来語の中身にも変化が見られ，記事素材となる語に減るものがあること，また社説の文体を形づくる語に増えてきたものがあることが明らかになった。

今回，W単位を用いた語彙調査を行ったことで，特に外来語の合成語や，混種語について，その使用状況を明らかにすることができた。外来語は，単純語として用いられるだけでなく，さまざまな和語や漢語と結合し，混種語としても用いられる。単純語としても合成語の成分としてもよく使用される「インフレ」「テレビ」「スポーツ」「カルテル」「エネルギー」「スト」「コスト」「グループ」「サービス」は，本調査において中心的な語彙である。今後，教科書，新聞以外にもさまざまな資料を用いた語彙調査をすることで，現代日本語における外来語の使用実態を明らかにしたいと考える。

（注）

① 拙稿「高校国語教科書の外来語」『同大語彙研究Ⅰ』同志社大学大学院日本語学研究会，1999,3，拙稿「高校教科書『国語Ⅰ』の外来語」『同大語彙研究Ⅱ』同志社大学大学院日本語学研究会，2000,3

② 口頭発表「現行の中学校国語教科書の外来語について」韓国日本語教育学会2000年度夏季第33会学術発表大会（於釜山経商大学）2000,8

③ 〈学習〉欄については，拙稿「高校国語教科書の〈学習〉欄の外来語」『大阪樟蔭女子大学日本語研究センター報告第８号』大阪樟蔭女子大学日本語研究センター，2000,3を参照のこと。

④ W単位については，国立国語研究所(1983)『国立国語研究所報告76高校国語教科書の語彙調査』秀英出版，国立国語研究所(1984)『国立国語研究所報告81高校国語教科書の語彙調査Ⅱ』秀英出版を参照のこと。

⑤ 国立国語研究所(1985)『日本語教育指導参考書13語彙の研究と教育(下)』大蔵省印刷局，p.8

⑥ M単位については，注④の文献を参照のこと。

（参考文献）

国立国語研究所(1973)『国立国語研究所報告48，電子計算機による新聞の語彙調査(Ⅳ)』秀英出版

岩淵悦太郎，西尾寅弥編（1975)『新・日本語講座１　現代日本語の単語と文字』汐文社

大野晋，柴田武編（1977）『岩波講座　日本語９　語彙と意味』岩波書店
田中章夫（1978）『国語語彙論』明治書院
村木新次郎（1982）「外来語と機能動詞―「クレームをつける」「プレッシャーをかける」などの表現をめぐって―」『武蔵大学人文学会雑誌13―４』
日本語教育学会編（1982）『日本語教育事典縮刷版』大修館書店
国立国語研究所（1984,1985）『日本語教育指導参考書13語彙の研究と教育（上）（下）』大蔵省印刷局
山田俊雄，築島裕，白藤禮幸，奥田勲編（1985）『新潮現代国語辞典』新潮社
金田一春彦，林大，柴田武編（1988）『日本語百科大事典縮刷版』大修館書店
玉村文郎編（1989,1990）『講座日本語と日本語教育６，７日本語の語彙・意味（上）（下）』明治書院
国立国語研究所（1990）『日本語教育指導参考書16外来語の形成とその教育』大蔵省印刷局
玉村文郎編（1992）『日本語学を学ぶ人のために』世界思想社
小学館辞典編集部編（1998）『例文で読むカタカナ語の辞典〈第３版〉』小学館
玉村文郎編（1998）『新しい日本語研究を学ぶ人のために』世界思想社

（付記）

本稿の執筆にあたり，全編にわたって，玉村文郎先生にご懇切なご指導を賜りました。ありがとうございました。また，堀川善正先生，藤井俊博先生，大島中正先生をはじめ，同志社国語学研究会の皆様にもたくさんのご意見をいただきました。朝日新聞社広報室には質問に丁寧にお答えいただきました。この場をかりて感謝の意を表したいと思います。